

## トルコの地政学・エネルギー回廊

2008年12月 大喜多 富美郎

### 1. 文明の交差点

トルコは古くから、文明の十字路・アジアとヨーロッパの交差点といわれている。今回、ヨーロッパ側のイスタンブール新市街からアジア側の工業団地を訪問、2つのボスポラス橋を渡り、ボスポラス海峡の船の中から2つの橋を見上げ、行き交う一般貨物船、オイルタンカーや自動車運搬船などに加えて、海峡の中央部に黒海方向を向いて錨を下ろしていた米海軍艦艇を眺めつつ、改めてこの国の歴史と地政学的な意味について考えてみた。

トルコ民族は13～15世紀にかけて、アジア、ヨーロッパ、アフリカの3大陸にまたがるオスマン帝国を作り上げた。第一次世界大戦後にケマル・アタテュルクの革命により、トルコ共和国となるまで、オスマン帝国皇帝は約6世紀にわたり多くの民族、宗教、文化の混在する広大な地域を支配していたのである。



第1ボスポラス橋 対岸に見えているのはアジア側の住宅街

この地域には、古代からギリシャ植民都市が多く建設され、東方のペルシャ帝国や中国との交易を行っていた。ローマ帝国時代は現在のトルコ・シリアが東方に対する前線基地であるとともに、東方文化や東方との通商の重要な中継点になっていた。中世からルネサンス期にかけて、ベネチアなどのイタリア諸都市が隆盛を誇ったのも、この地域を経て東方世界との交易で富を築いたからである。また徐々に世界史の中に登場してくるロシアや北欧・東欧諸国も、北海から黒海、カスピ海につながる河川を通じて、アジアや地中海とつながっていたのである。16世紀の大航海時代以降の新大陸や新航路の発見により、交易面での独占状態は崩れたものの、この地域は地政学上の最重要地域の一つであり続けた。

だからこそ、ロシア帝国やそれを引き継いだソビエト連邦は、南下政策を取り続けたし、英仏などの列強もオスマントルコ帝国の領土を侵食し続けたのである。そして第一次世界大戦によりオスマン帝国は解体され、トルコの領土は現在の形に縮小し、英仏ソを中心とした分割支配が確立し、現在のバルカン半島から、北アフリカ、中東の各国の国境線もおおむねその時期に欧州諸国によって決められたのである。

### 2. 現代トルコの存在感

現在のトルコは公正発展党政権の下で、インフレの鎮静化に成功し、安定的な経済成長を続けている。トルコ経済に昨今の金融市場の不安定化、世界同時不況が今後どのように影響するかは予断を許さないが、7,000万人の人口を有するヨーロッパおよび中東の大国であり、一人当たり国内総生産も1万ドルに達しようとして



トルコの繊維工場 男性工員が多いことが目を引いた

しているトルコは、中長期的に地域経済の重要なプレーヤーであることは間違いない。事実、イラクやエジプトをはじめとする中東諸国や、中央アジア諸国に対するトルコからの海外直接投資は近年拡大している。トルコがEU 関税同盟に参加していることから、EU 向けの輸出基地として、トルコに拠点を置いている企業も多い。日本企業でも、例えばトヨタ自動車の現地法人など業績も好調で、社内的な評価は非常に高いとのことである。日本から対トルコの直接投資はまだ多いとは言えないが、トルコ側からは企業誘致ミッションの派遣など、活発なアプローチが行われている。今回のミッションでも、トルコ企業とのミーティングでは日本の企業とのタイアップについて、大きな期待が表明されていた。

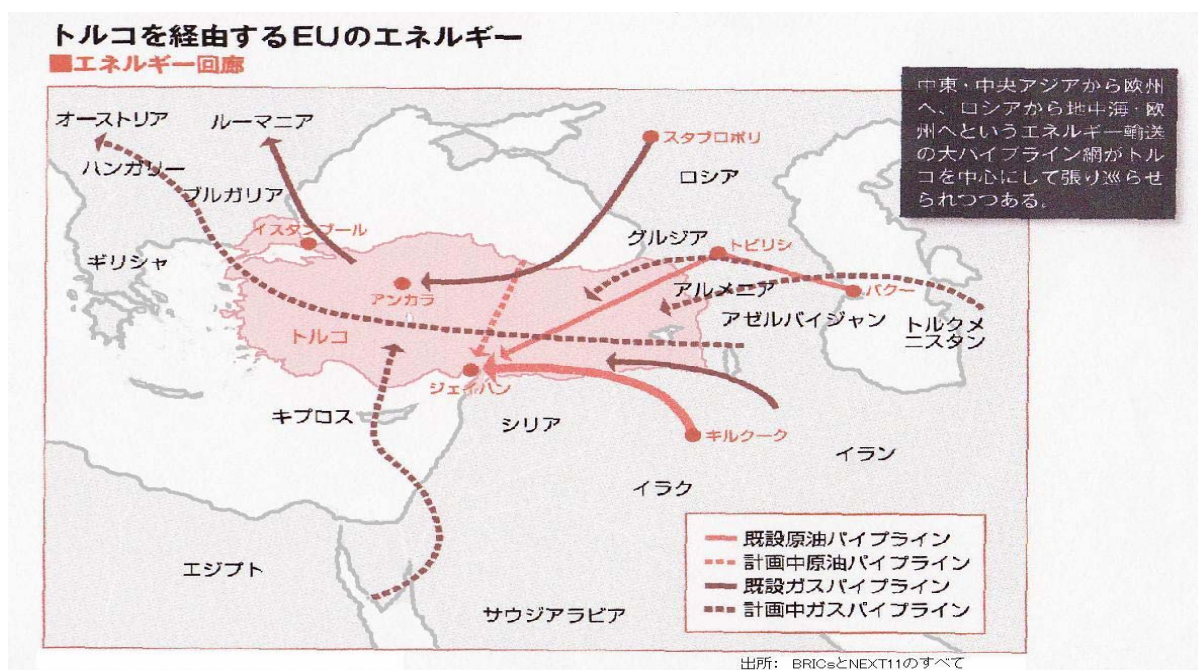
安定した政治・経済体制の下で、世界の中でのトルコの存在感が再び高まってきている。公正発展党政権は、外交面でも多くのイニシアティブを取っている。たとえば、シリアとイスラエルの和平交渉開始を仲介、イランとの経済交流交渉、グルジア紛争勃発時には首脳がモスクワに飛んでメドベージェフ大統領と会談している。また、過去にはやや疎遠であった湾岸諸国首脳とも交流を深めている。あえて言えば、米国がこの地域で主導的な力を失いつつあるのを、トルコが補っているような印象さえ受ける。

### 3. エネルギー回廊

トルコの存在感を示すものの一つに、トルコのエネルギー回廊戦略がある。トルコは、原油や天然ガスの産出はほとんどなく純輸入国である。トルコは天然ガスや石油をロシアや中央アジア、イラン、イラクなどから輸入しているが、このエネルギー供給のために国内に縦横にパイプラインが張り巡らされており、今後も多くのネットワーク・施設の建設が計画されている。その一方で、イラクのキルクーク油田の最大の輸出ルートはトルコ経由のパイプラインであり、黒海沿岸のロシアなどからの原油の多くはボスポラス海峡を経

由して輸出されている。つまり、一部産油国の輸出はトルコ領内を通過しているのである。アナトリア東南部の地中海に面したジェイハン港には、ロシア、アゼルバイジャン、イラクなどからの原油パイプラインが集まり、原油の一大輸出港となっている。この、ジェイハンに天然ガスの液化プラントを作り LNG の輸出も行う計画が進行している。

また、ヨーロッパのエネルギーは天然ガス化が進んでおり、その多くをロシアや中央アジア諸国から、ロシア国内を通過するパイプラインを使用して輸入している。今後も天然ガスの輸入依存度は高まると予想されており、ここに安全保障上の問題点がある。ロシア経済が回復しプーチン・メドベージェフ体制の基盤が強力になり、ロシアが自信を回復するにつれ、グルジア紛争時のようにロシアとヨーロッパの関係が緊張するリスクが高くなってきている。エネルギーのロシア依存が、そのような事態における NATO や EU 諸国の対応を制限してしまう可能性があることは想像に難くない。



このロシア・リスクに対処するために、ロシア以外からのエネルギー資源の調達とロシア領内通過を回避できる輸送路の確保が必要となる。そこで、東西・南北の交差点トルコが重要となる。アゼルバイジャンのカスピ海原油を、グルジア経由トルコに運ぶ BTC パイプラインはすでに稼働している。この原油パイプラインに並行して天然ガスも輸送する計画がある。(ただし、このルートはロシアのグルジア侵攻時に中断され、安全保障上は問題があることが確認されてしまった。) イランからトルコへのガス・パイプラインを、オーストリアまで結ぶ計画がスタートしている。エジプトで盛んに新規開発されているガス田やイラクのガス田から、トルコ経由のパイプでヨーロッパに輸送する計画もある。これらの計画は、EU の TEN s (Trans-European-Networks) 計画に組み込まれている。現状では、トルコ内のパイプラインのキャパシティが十分ではなく、またロシア迂回の輸送路開発には、当然のことながらロシアの反発も強く、トルコ経由のエネルギーの対ヨーロッパ本格輸出

には、今しばらく時間がかかるであろう。しかし、TENs 計画は今後も進んでいくことは間違いなく、トルコの地政学上の重要性はさらに高くなっていく。

### 4. 21 世紀のトルコと日本

トルコの EU 加盟問題は、早い段階での加盟の実現は困難とみられている。しかし、EU にとって前述のエネルギー問題を含め、トルコが中東、中央アジア、ロシア等との接点・入口として非常に重要な位置にあることは間違いない。米国も、混乱するイラク情勢、イラン問題、中東和平などの難しい問題の解決に欠かせない国として、トルコに地域のリーダーの役割を期待しているようである。ロシアとの微妙な関係に揺れるコーカサス、中央アジア諸国にとって、トルコは自国経済の活性化に無くてはならない国である。また、シリア、イラク、イランだけでなく、湾岸諸国にとっても NATO や OECD に加盟しているイスラム教徒の国として、自分たちの代弁者・代表としての役割を期待されている。現在の公正発展党政権は、このあたりをよく認識して、国際的な役割を強めつつあり、国際社会にとってトルコの役割はより重要になっている。

トルコ国民の親日度については、いろいろなところで言及されているので、説明の必要はないだろう。日本とトルコは、アジア大陸をはさんで東西の端に位置し、昔から陸のシルクロードや、海のアジア交易路で結ばれてきた。特に海のアジアに関しては、現在のマレー半島、インドネシアなどを中継点にして、アラビア商人と東アジアがビジネスを通じて繁栄を共有してきた通商回廊である。近世の西欧列強による植民地化や、その後の民族主義化等によりそれぞれがバラバラに分解してしま



ボスポラス海峡で黒海方向をむいて  
停泊中の米海軍イーグリス艦

ったが、本来的にアジア人として共通の価値観を持つことのできる地域なのである。この地域の多くの国が現在 BRICs や NEXT11 などの新興国家群として、継続的な成長を期待されている。日本にとっても、中東やヨーロッパとの貿易に欠かせないシーレーンである。現在のこの地域にはイラクやアフガニスタン、パキスタンのように政治・社会的に不安定な国々が多く存在していることは事実である。しかし、中長期的には日本とトルコを結ぶ国々の多くが、潜在的に高い経済成長力を持っていると評価されている。日本とトルコが協力してこの地域に平和で、かつ活力ある市場・生産拠点のチェーンを構築して、経済をベースに安定した国際的回廊を再構築することは、21 世紀における両国の目指すべき一つの役割ではないだろうか。

(本篇は 2008 年 10 月に、中小企業診断協会東京支部のトルコ訪問ミッションに参加した時の報告書の一部です。)